

(別紙2)

審査結果の要旨

氏名 新田智通

本論文は、初期仏教經典集成の一つであるディーガ・ニカーヤに所属する『大譬喩経』と、その注釈書『大譬喩経注』(5世紀、ブッダゴーサ作)を主要な題材とし、そこに現れた過去仏思想を、南伝、北伝双方の関係諸資料を対照しながら、伝統仏教内部において仏がいかなる存在として理解されていたかを解明したブッダ研究である。国内外における仏伝の研究を整理検討した序論、『大譬喩経』が扱う4テーマに沿って立てられた4章よりなる本論に加え、新たに校訂した『大譬喩経注』のパーリ語テキストおよび和訳と注を添えたテキスト部の2部構成を取る。

序論において仏伝にかんする研究史を丹念に辿るなか、著者は近代の仏教研究において一つの通念となった、人間ブッダの神格化という理解を、聖人伝や神話学的立場からの近年の諸研究を総合しながら問い直し、考察の対象から排除されてきた仏伝における神話的記述を積極的に解釈し、伝統内在的なブッダ理解を再現する必要を説く。この基本的態度に沿い、第1章「過去諸仏の同一性と差異について」では、『大譬喩経』のみならず諸論書において、諸仏の個性はそれぞれの仏が誕生する世界が抱える個性に限定されて出現し、仏じたいはそのコスモロジーを成立させる中心点という役割において平等あるいは同一と理解されていることを明かす。第2章「菩薩誕生時の法則」は、仏が誕生する前兆について諸文献を精査し、世界を超越した仏が世界に限定されて出現する、仏の特異な存在論的構造としての型が示されていることを明かし、第3章「三十二相の意味」においては、仏の32の身体的特徴が、修行者の観想の対象でもあり、かつ教義の集合ともなるなど、仏教教理体系全体の象徴的意味を担わされていることを示す。こうした仏をめぐる仏教内部の議論は仏身論に集約する。第4章「部派仏教における二身説」ではこの課題を正面から取り上げ、過去の研究と関連諸文献を綿密に辿りながら、色身と法身の基本的関係と理解とを明確に論じた。テキスト部では、W. Stedeが校訂しI. B. Hornerが再治した『大譬喩経注』をさらに訂正した改訂テキストを作成するとともに、邦訳はもちろんいかなる近代語訳も存在しない原典を分かりやすい邦語に訳しだした。

歴史還元主義的な理解を改めて仏伝を読み直そうとする問題意識は鮮明であり、研究史の整理と関係資料の網羅も丹念になされ、諸処に新たな発見を含む。ことにパーリ註釈文献で示されるブッダ理解が、サンスクリットや漢訳で伝承された北伝の資料と相補的な関係を作り上げていることを示したのは、ブッダ研究のみならず仏教研究全体にとって有益な貢献である。さらなる考察の掘り下げや註釈文献先行研究の精読が望まれる箇所も存するものの、総体として学界に寄与するところ大きく、審査委員会は本論文が博士(文学)授与に値するものと判断する。